



第24号

栃木県書道連盟
 会長 中野 永峰
 〒321-0951
 宇都宮市越戸4-4-21
 TEL (028) 661-6329
 編集事務局
 振替口座 00340-3-9017
 〒329-0434
 河内郡南河内町祇園2-19-410
 印刷 松井ビ・テ・オ・印刷

文化団体として 理想的な 書道連盟を目指して



会長 中野 永峰

会長 中野 永峰

初秋の候、会員の皆様方には益々ご清祥お慶び申し上げます。

今年、会長就任以来、四年目を迎えました。この間、連盟改革実現の時期で、役員各位を始め会員皆様方には絶大なるご盡力をいただき誠に有難うございました。今年も何卒よろしくご指導ご支援の程お願い申し上げます。

「何かをするだけなら難かしくない。よくすることが難かしいのだ。」(孟子)

「伝統文化が減びると、その国は滅びます。」

説

本書道連盟の躍進は誠に重大な事です。文字を書く伝統文化を守らなければなりません。」

中国古代聖天子の堯や舜の作った理想郷の伝統のように、二十一世紀の今日、書道連盟は民主体制の公正な理想郷で、心豊かに生きることこそ、会員の念願とするところです。

書道連盟は、創立以来県内隅々に底辺を広げ、東西南北均衡型の、高いピラミッドの理想的な会の実現に努めて参りました。

会員数につきましては、皆様方のご協力によりまして、総会当日、九四八名で、間もなく千名会員達成に近付きました。

会員名簿を見れば明らかですが、県内二十地区を五つのブロックに大別してみますと、



連盟会員展会場

県央が約三八〇名、東部約一二〇名。西部約七〇名、南部約二四〇名、北部約一二〇名。県西地区につきましては、山間地区などの事情もあるでしょうが、少しでも可能性を見付け出し、書道文化の輪を広げ、若手後継者を育成すると同時に、連盟会員増加にもご盡力下さいますようお願い致します。

県南地区につきましては、役員の方々の積極的活動によりまして、会員数が急増して参りました。東部、北部地区につきましても、継続は力なりのご支援をお願い致します。

平成十六年度の行事につきましては、事務局、総務部、研修部、書展部におきまして、各部署局長を中心に周到な計画により、画期的な成果を上げることが出来ました。

特記事項としては、

一、会議は、年間四十九回開催されました。

二、事務局では、会員増化等で仕事も増えて、時には深夜執務になりました。

三、会費の徴収状況につきましては、会計係のご盡力と、会員のご協力によりまして、八八一口を納入することが出来ました。

四、総務部では、会報をカラーにし、内容も地区日より等を載せ、更に視点を拡げ好評でした。

五、研修部では、若手後継者育成のために、高校生書道顕彰を実施し、十八名に「栃木県書道連盟表彰状」を授与しました。

六、書展部では、書展運営の合理化をはかり、搬入、展示、搬出には、各地から多数の動員があり、出品数も急増しました。

(その他の記事は、行事報告参照)

平成十七年度の行事につきましては、書展部が、連盟創立来初めての、「第四十四回栃木県書道連盟会員展」の案内状を作成しました。各部署は、よりよい事業を通して、会員皆様方のご期待に添うよう努めて参りたいと存じます。六十周年記念事業も準備開始です。

最後に、会員の皆様方の益々の筆硯ご多様をご祈念申し上げる次第です。

行事報告

平成十六年度第58回栃木県芸術祭美術展書道部門報告

古典を学んで次なるチャレンジを

第五十八回展の応募総数は、四三三三点(昨年より三五五増)で入賞入選三〇二点(入選率六九・七%)。

各部門別の応募数(一)内は入選点数である。

漢字多字数 三二一(二二九)

漢字少字数 三八(二二)

漢字仮名交り 三四(一九)

仮名 二二(一六)

篆刻 二七(一六)

刻字 一(〇)

本県は、漢字部門が応募の支柱で、七三・一%を占める。中央書壇の公募展の状況から推測するにまだ多くの書家が潜在しておられる。今後これら潜在作家の掘り起こしが大きな課題である。

審査は、午前鑑別、午後入賞者決定で進行され、特に入賞決定審査では、挙手と合議、投票と慎重かつ厳正に進められた。

入賞作品は、さすがに個性的で練度の高い作品が目立った反面、例年審査員が指摘するように特に漢字多字数部門で師風の氾濫が目立った。中堅、ベテランクラスの書家は、更なる古典の研究を重ね、構成、書線等で審査員を魅了する作品を出品してほしいものである。また本年も落款の拙い作品が目についたとの指摘があった。

○芸術祭賞 村田幽香

漢字多字数 崔塗詩 行草三行

常任顧問 重原 聖鳥

長鋒を巧みに駆使して、文字の大小、太細墨色よく潤渇の変化が見事に生き、リズムに乗った運筆は、詩情豊かで女史の力量を示した秀作。

○準芸術祭賞 赤澤寧生

漢字仮名交り 片山由美子句二行

若手のホープ。潤なる線と破筆が巧みで美しい書線は優雅で格調が高い。紙面を切り開くよどみない動きに力量を感じる明るい作。

○準芸術祭賞 安藤磨紀

篆刻「執冲含和」白文印

本県篆刻界リーダーの一人。語句が示すようにやわらかく温味のあるふところの大きな作。構成の粗密も巧みで明るく樂趣がありベテランらしい安定感のある作。

○奨励賞 大竹青嵐

漢字多字数 孫貴詩 篆書五行

戦国期の古典を基調とした豊かな円運動と鋭いタッチで書線が安定しており、かつ生彩がある。章法もよい。欲を申せば潤渇の変化が

準芸術祭賞 安藤 磨紀

欲しい。

○奨励賞 郷間大悠

漢字多字数 良寛詩 行草三行

重厚な線で、連綿体を支柱とした運筆。気合充分、精力的な書きぶりで明るい構成の心地よい作。

○奨励賞 佐川青龍

漢字多字数 山行 行草三行

古典の研鑽からかもし出された弾力に富んだ書線は、筆の開閉が巧みで気脈の一貫した快作。

○奨励賞 鶴見芳花

漢字多字数 王建詩 行書四行

清流の流れのように淡墨ぎみの墨色での自然な運筆は、軽快なリズムで統一されており手練た理知的な作。古典による文字構造の追求を切望する。

○奨励賞 北條正浩

漢字多字数 李白詩 行草三行



準芸術祭賞 赤澤 寧生

筆力十分にこもり練度のある充実した書線は重厚さがあり安定感のある作。羊毛による味わいのある渇筆もよい。

○奨励賞 荒井久雄

漢字少字数 和風 篆書二字

本県この部門は、独立書人団系の作風が主流を占めるなかで、甲骨文、金文を素材とした造形感覚を追求しておる作で筆力のこもる作。課題は渇筆の処理と落款の研鑽。

○奨励賞 阿久津天舞

仮名 三歌 横物

運筆のリズムが非常に軽快で、連綿も自然な脈絡をもち特に細線が作品に明るさを加えた。

○奨励賞 人見翠苑

仮名 横物

安定した練度の高い線と趣があり、明るく朗澄な作で技量の高さを物語っている。

○奨励賞 嶋田 周

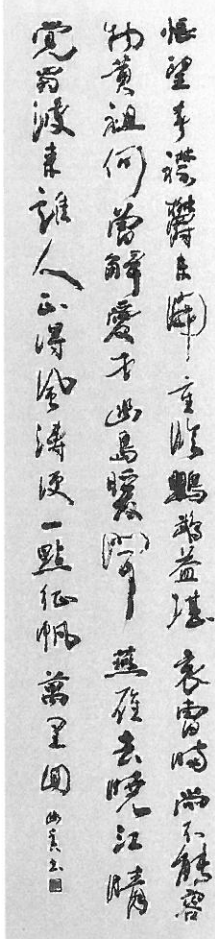
篆刻「虚心坦懷」

刀の切れ味の巧みさと文字構成の正確さが相乗効果を生んで力量のほどを示した作。

なお、惜しくも賞を逸した作として、漢字多字数部門の石川子澄、倉持玄風、関口鶴情の三氏を挙げておく。

書は芸術である。古典を学んで、次なる五十九回展にチャレンジすることを切望する。

芸術祭賞 村田 幽香



平成十六年度研修旅行

研修部 坂本 芳久

サントリー美術館見学
ニューオータニ、浅草散策

本年度の研修旅行は10月11日(月)、「古代中国の文字と至宝」展・サントリー美術館見学とホテルニューオータニ中華料理バイキング及び浅草散策をメインに、吉田景堂研修部長の下に企画され、中野会長、鈴木・赤澤副会長を初めとする総勢43名が参加して挙行された。

朝7時20分、宇都宮駅東口に36名集合、早朝雨降る中、東急観光手配の大型バスで予定通り出発、宇都宮上三川ICより、北関東・東北道より一路、南に向かう、佐野文化会館にて7名乗車し、佐野ICよりサントリー美術館へ向けて出発した。

吉田研修部長の日程説明や、中野会長のご挨拶がある。

途中蓮田SAで休憩し再び、サントリー美術館へ。車窓より埼玉スタジアム2002や両国国技館を横目に、また松尾芭蕉の奥の細道の出発の地や、日本の政治経済の中心地を通り、サントリー美術館に到着した。美術館前にて記念写真を撮る。10時30分、11階美術館



に入り見学を開始する。

古代中国の文字と至宝展は、中国湖南省省都長沙市周辺で出土した、それは、極めて重要な二つの考古学的発見であり、馬王堆と走馬楼である。

馬王堆漢墓は、1972年に発見、女性のミイラと副葬品が奇跡的な保存状態で出土し、2000年前の文物を見事によりみがえらせ世界のビッグニュースとなった。

一方、走馬楼の木簡は、学術的に価値の高いもので、行書、楷書でなく、王羲之以前の草書を垣間見ることが出来る。

今回、日本での公開は、93種227点の文物を一堂にした展示である。未だ墨痕鮮やかな帛書や木牘竹簡を中心に、印、漆器や絹織物木俑青銅器など、国宝級の文物を含む貴重な出品である。紙の使用以前は、竹簡木簡あるいは帛書(絹の布)などに書写されたのである。

竹簡は数ミリ幅に、木簡は杉板に、帛書は絹の布に朱色の罫線に書かれ、それぞれ鮮明な文字として残っており2000年以前の宝物を目にすることができたのはまことに幸運であった。

古代中国では、「竹帛二書キ、金石二鏤ミ、盤盞二琢ス」と言われるそうである。その他の出品物も大変勉強になった。サントリー美術館での見学という大変有意義な時間を過ごす。

した後、バスにてホテルニューオータニ本館17階ブルースカイの360度回転ラウンジに移った。そこからの眺めは、都内でも屈指の素晴らしい景色であった。全員揃った所で、鈴木副会長の発声で乾杯、中華料理バイキングをご馳走に舌鼓を打ち、和気藹々歓談する。

今日最後の予定地浅草に向かう途中、東京ドーム、順天堂医院や秋葉原電気街、上野を通り、浅草二天門前に到着、約一時間参拝や散策にあてた。浅草寺を参拝。本堂の両脇に掛かる額は、大田原出身の先達、豊道春海先生の筆である。小山の山中香葉先生の資料は鑑賞に大変役立った。参加者は各自それぞれに、浅草散策を楽しみ、浅草を16時に出発。途中蓮田SAで、コーヒー紅茶のサービスがあり、皆さんひとときの至福の時を過ごすことができた。バスは帰路に就く。利根川を渡り中野会長の最後のご挨拶がある。佐野ICより、佐野文化会館にて7名下車、東北道北関東道を経由して18時50分、宇都宮駅東口に無事到着、散会した。各人満面の笑みでほんとうに充実した楽しい一日でした。参加された会員の皆様ご協力有難うございました。また来年を楽しみにご参加下さいますように。

重原聖鳥氏 栃木県文化選奨受賞 祝賀会

総務部長 松本 弘元

平成十六年度栃木県文化選奨を本連盟常任顧問、重原聖鳥先生が受賞されました。受賞理由は文化振興大会パンフレットによれば次の通りです。

「氏は書を文化勲章受章者金子鷗亭氏に師事する。

昭和六十三年創玄書道会二科審査委員となる。

平成元年毎日書道展近代詩文書部で秀作賞を受賞。

平成五年には毎日書道展（第四五回展）において会員に就任。

平成九年創玄書道会一科審査員となる。

現在、日本の書展招待作家・創玄書道会審査員・毎日書道展会員として中央書壇で広く活躍されている。

県内においては三十歳代で栃木県書道連盟幹事に就任。その後事務局長、副会長、会長、現在の常任顧問に至るまで、三十数年間栃木県書道連盟の運営、発展に尽力するとともに、県芸術祭においては、運営委員、専門委員、実行委員、審査員を歴任するなど、栃木県書道界の振興に寄与した功績は、多大なものがある。

現在、栃木県文化協会理事、下野の書展、栃木の書壇五十人展の代表理事として、さらに県青年書作家協会の顧問として助言にあたる一方、NHK書道教室講師として後進の指導育成にあたっている。



平成十六年に下野新聞社主催による個展を開催。氏の作品は大らかで、品格のある作として高い評価を得ている。

氏の永年に渡る県内外の活動は顕著であり、本県の文化振興に大きく寄与し、貢献した功績は大なるものがある。」

この栄えある受賞祝賀会が平成十七年二月

二十日（日）ホテルニューイタヤで盛大に開催されました。出席者一二六名、会は鈴木源泉副会長の開会のことは、そして中野永峰会長の主催者挨拶。赤澤豊副会長の来賓紹介から栃木県文化協会副会長安久津和夫様、下野新聞社常務取締役関根宏信様の祝辞を頂き記念品贈呈、花束贈呈へと進み、さらに文化協会副会長荒井宗明先生の乾杯で祝宴に入りました。栃木県書道連盟の発展と充実に長い年月、中核にあつて尽力されてきた重原先生。そしてまた、作新学院高等部での永年にわたる書道教育。この間栃木県高等学校文化連盟書道部会の創設にも尽力され、全国高等学校書道教育研究会では副会長の要職もつとめられました。その実績は枚挙に暇がありません。そのような先生の受賞祝賀会だけに、宴も大いに盛り上がり、それぞれのテーブルでは「乾杯」「乾杯」の声が何度もあがつて実に愉快に、楽しくすごすことができました。当日は、総合文化センターで、本会女流作家による展覧会が開かれたこともあつて、会場に華をそえてくれたように思いました。

先生は、真言宗豊山派慈眼寺住職として宗内でもご活躍です。今後ますますのご活躍をお祈りするとともに、健康にはくれぐれも留意され、我々県書道連盟会員に、更なるご指導を賜るようお願いして、祝賀会の報告とさせていただきます。

平成十六年度第21回女流展

書展部 中山 志峰

会期 平成十七年二月十九日(土)～二十一日(火)
会場 栃木県総合文化センター第四、ギャラリー
早咲きの梅が開く時季、今年は異常気象の為、寒暖の差が激しく気温の上昇に合わせ開花の機を待っている。

この折、恒例の女流書道展が開催された。

今回の二十一回展を開催するにあたり発生川天遊書展部長、齊藤一吼副部長を中心に書道連盟大浦舟人事務局長、村田幽香事務局次長の出席を願って今回展の開催準備が整った。飾り付けの十九日は九時三十分より計画案に基づいて作業を進め、予定時間を大きく短縮し余裕をもって棟列終了となった。搬入時より飾り付けにいたるまで、出品者女性作家、連盟役員、会員、業者、書展部員、大勢の方々の応援ご協力のおかげであつたと感謝をしている。総出品数は二二三点、ジャンル別では漢字一三一点(創作一二八点、臨書三三点)大字二字まで九点(仮名五一点、現代詩文三〇点、篆刻一点、刻字一点であつた。作品の内容は数字が示す通り漢字が圧倒的に多く仮名、現代詩の割合で続き、質的には各種共研鑽を積んだ証が窺えた。

会期中は女性作家は勿論であるが、女流展という関係上一般の参観者は女性で賑わつた。二月二十日(日)の講評会は栃木県書道連盟副会長柿沼翠流先生を講師に迎え、進行役を大類天鶴氏、両氏が相マッチしユーモラスで質問が多発し解説、会場内は和やかな雰囲気であった。まとめとして「古典臨書の勉強が大切である」と、講師は主張された。講師の熱意あふれる講評により予定時間を忘れる充実した講評会となった。

以下講評を受けた作品の寸評を記す。

(講評順)

○我妻淡雅氏

○龜山玉星氏

○阿久津杏佳氏

文字自体の持つ空間を大切にすると良い。
呼吸を感じる美しい作品。かなは漢字が大切である。
この作品注目している。線質もよく情感がこもっている。



- 阿久津幸子氏 行の振り巾を大きくすると線の張りが出た、パワーある。一行目の高さから二行目は狙いですか？
- 飯野彩心氏 隷書を心得ている。縦画をし横への広がりを強くすると良かった。
- 石井立翠氏 墨の響を考えると、墨をすつた方がよい。作品が良いだけに残念である。
- 石川子澄氏 書きこんでいる。安定感がある。
- 石崎竹甫氏 臨書を習って線質を高めるとよい。よく書きこんでいる。
- 井野維子氏 品のある作品。法帖を良くみている。
- 宇賀神貴美子氏 頭の位置並び上げる。おだやかな良い作品。
- 永塚薫風氏 文字の力感が同じである。変化がほしい。
- 及川紫峰氏 漢字で培った用筆が生きているが、かなのパワーは不足。切れ味のよい作品。明るくてよい筆脈。
- 大関都史氏 表具失敗。文字を少し小さくしたほうがよかった。
- 大橋禎僊氏 古典習っています。少し重い

- 加茂珠香氏 線質が深い。格が高い作品。誠実な良い作品。渴筆があれは尚よかった。
- 菅野照美氏 技術の確実さがある。作品のめりはりがあふれる。
- 久住晴美氏 作品感がある。古典を作品の中に活かせる。よい。
- 窪田笑子氏 技術をこえた美しさがある。明るくてよい。印が大きい。文字の構成がややせまいところがある。歯切れはよい。
- 条川久舟氏 新鮮さがある。部分的に終筆がうまくいっていない所がある。
- 小池素子氏 おだやかな作品。印を小さいものにしようがよかった。
- 小林信瞳氏 近年の作品の中で最もよい作品。自分らしさが出ている。
- 小森聖子氏 線質もよく良寛を書いている事が遠目にもよくわかる。
- 齊藤美与子氏 隷書の特長をよくとらえている(曹全碑)
- 佐藤秋苑氏 文字が単体になっている。全体の流れがほしい。筆力はある。
- 佐貫和子氏 書きこんでいる作品。
- 佐山春翠氏 文字の大小をつけるとよい。
- 潮田恵子氏 終筆の方向が同じである。
- 始澤多恵氏 品があり、おだやかな作品である。
- 柴田響水氏 最後の二文字がやや重い感じがする、渴筆を用いるとよい。
- 白井薫苑氏 終筆のさばきよい。
- 杉本澄子氏 文字の頭を大きくするとよい。
- 逆三角形がよい。
- 杉山洋子氏 墨を少し多くつけると更によかった。ちよつとさわがしい。
- 鈴木英華氏 最後で気持があらたまつた。
- 鈴木貞心氏 縦画を強く書くといよい。
- 須田白兔氏 前半はよいが後半が少し固い。
- 関谷小雪氏 書格が高い。清らかな作品。
- 芹澤翠蘭氏 明るい作品。線質もおだやかに心をとめて作品を書いてい
- 田村美雲氏

- 塚原彩香氏 文字の置き場所を考えるとよい。
- 手塚秀枝氏 明るい作品。筆の弾力をうまく用いている。
- 登坂時子氏 作品の練度が高い。一行目にアクセントをつけるとよい。
- 東峰彩苑氏 初期の感動を感じる。筆がはけの様になっている所がある。
- 長棹芳枝氏 自分らしさがほしい。筆の傾き等の工夫がほしい。
- 野沢安喜子氏 濃墨を使って線を引ききつてることがすばらしい。
- 林 游季氏 リズミカルな動きある作品。一画の側筆により作品にゆとりが出た。
- 伴瀬桂舟氏 線に張りがある。
- 藤田貞子氏 作品の完成度が高い、やや全体に細身である。
- 文挾香山氏 自分の言葉を書いている、いつも感心している。
- 前田珠芳氏 線の太い所を渴筆にするとよい。全体に狭い感じ。
- 松島芳子氏 線質もよく流れも美しい。やや速度が速い。
- 松島美舟氏 作品の流れが美しい、自分なりの作品。
- 八木澤翠葉氏 少し太い線のところに淀みがある。
- 山口晴子氏 良い作品(特に満の字に品格がある)
- 山田雅子氏 やや右上りが強い。「一」と「天」の横画が同じ角度。
- 山本紫苑氏 兎に角うまい。最後まで書ききっている、相当書きこんでいる。
- 山田雅子氏 流れが美しい、印の活きている作品。
- 吉川美代子氏 作品の中のどこに焦点をあてるかを考えるとよい。
- 吉田長子氏 古筆を作品に活かせる。よい、変化をつけた。
- 吉田紀子氏 女性としてはパワーがある、字間がつまっている。
- 吉田紀子氏 臨書だから、臨紀子より紀子臨にしたほうがよい。

平成十六年度実技講習会

理事 大類 天鶴

「古法について」

講師 上松 一条先生

今年度は、講師に、独立書人理事・毎日書道会参与・日本書道専門学校長である上松一条先生をお招きして、『古法について』のテーマで講習会が実施された。

赤沢副会長の開会宣言、中野会長の挨拶、柿沼副会長の講師紹介を経ていよいよ講習会の始まりである。

まず、上松先生の御挨拶。そして講話。

最初に「私の書の理念」として、第一に人と書とは切っても切れないものである。独走の書は本当の書ではない。第二に、古法といふものは、語って聞く人に伝わるものではない。自分で求めて自分で体得するしかない。



第三に、書は国際性を考えるべきであり、代表的な日本の文化であるということを心に刻みこむことが必要である。国際性の表舞台の裏には、職人としての地道な努力が積まれて名人が生まれるのであり、そこで初めて書の芸術性が解るようになる。と主張された。

次は、古法について。一つめは、意先筆後。

これは、考えるのは簡単だが手が言うことを聞いてくれない。なかなか容易ではない。二つめは、八面出鋒ということ。古法が出てきたのは「行・草」が使われはじめた頃で、王羲之・鍾繇あたりから始まる。だから、漢の時代には古法は無かった。古法を語るとき、筆のどの面も使えないと言っている人がいるが、これは半分は当たっている。残りの半分は何かというと、筆の当たる面が有機的かつ必然的であることで、初めて古法になってくる。手島先生は、古法は、単なる技術の表現方法ではなく、心法であるとも言われていた。古法の中核に、王羲之・空海・太宗皇帝を、周辺として、褚遂良・米芾・王献之、虞世南・顔真卿、手がかりとして、貫名松翁・鍾繇・隸書を提示された。講話の後は、臨書の実技講習である。古典は羲之の「喪乱帖」。先生は「羲之頓首 喪乱之極は、コピーで配つてあるので、次の、先墓再離から始めよう。」と、各班に対し半紙で三枚の模範揮毫

をされた。

先生は、長鋒羊毛を単鉤法で執筆される。静寂な中に濃墨の心地良い香りが漂う。「先」の字に対峙する先生の眼光が鋭くなるのを覚えた。スッと鋒先が紙におり左下に動く。瞬間的に鋒は陰から陽に転じ、スウーッと静かに右上に上がり、そこで鋒に捻れが生じてピツと跳ね上がる。その後、鋒先はキュッキュツと音を立てながら、生き生きと左下へ進んだ。そして終画はあくまでも遠くに。「陰・陽」は言うに及ばず、「突く」、「捻る」、「叩く」、「遅・速」、「大・小（太・細）」、「直・側」など絶妙な運筆で、次々と臨書を続けら



れた。まさに「神技」であると思った。先生が筆を置かれた。フウーッという溜息とともに大きな拍手が湧いた。多くの受講生は、「目から鱗」だったようだ。中には、感激し涙ぐんでいる方もいた。

感激と興奮が冷めやらぬ昼食。素早く済ませ、すぐ席に戻って筆を持つ人も少なくなかった。とにかく、偉大な影響力である。

臨書の添削は希望者が殺到し、時間の関係で、最後は何人かをまとめた指導となったが、その先生の手際よさも光った。

最後は、先生の作品模範揮毫である。やはり、これも四班に分かれ、先生の筆技を拝見できた。

紙面の都合上、ここではその一コマを紹介させて戴く。

「明珠在掌」を二字ずつ、全紙二枚に書かれたときの様子である。

筆管の先端を三本の指で持たれる。何か呪文でも唱えるかのように筆に淡墨を含ませる。先生の動きが止まり、ストーンと紙に筆が載せられた。打点は相当に高い。一瞬、筆は止まり、直に入った鋒は側に転じ、捻れながら次の画に移ってゆく。鋒の瞬発力は十分に溜められハジケて次の画へ。バラバラになった鋒は、先生の巧みな筆捌きによってまとまり、そして、開いては閉じ、陰となり陽となつて、闊達自在に紙の上を駆けめぐった。受講生一同只々出るのは「溜息」と「拍手」のみであった。

上松先生には、公私共に御多忙の中を、抗ガン剤を投与なされながら来て戴いた。上松先生、御指導本当にありがとうございました。

（追）去る七月十七日、早朝、上松一条先生は肝不全で逝去されました。心から冥福をお祈り申し上げます。

平成十七年度講演会

「中国新発見の書蹟・十選」

講師 西林 昭一先生

研修部 倉持 玄風



四月二十四日(日)、栃木県総合文化センターサブホールにおいて、跡見学園女子大学名誉教授・(前書道史学会理事長)である西林昭一先生をお招きして、中国新発見の書蹟・十選というテーマで講演をしていただいた。サブホールは新発見の書蹟が気になるのかは満席、先生の軽快な説明と画像での捉え方が大変理解しやすい講演でした。講演内容は①～⑩まで資料に基づいて始まった。①速の諸器(西周晩期)、高さ20cm巾53cmの鼎で器形は両耳三足を有し食物を煮るのに用いたが後には祭祀用、王室の宝器として王位、権威の象徴となった。書法も固定化したこの期においては優れている。②里那秦簡(秦前二二—一二二)木牘で370枚出土、表

裏に秦隸とも言われる準公用体、標準体として使われ実用的に略字も多い。驚きは九・九が書してあり他に医薬、法令、日書、家信、などが書かれている。③秦公一号石磬刻字・秦景公四年(前五七三)、陝西省鳳翔県南指揮村で十年をかけて発掘、石磬は縦横の比率は2:3(典礼用の石製の打楽器)、に刻され、銘文の様式は堅長にとり曲直巧妙、理知的な結構であり説文より簡略な字例もあり小篆体に近い規範性がすでにそなわっていた。④郭店楚簡戦国楚(前三〇〇前後)、湖北省荊門市沙洋区郭店村内で東西350・南北700m内に点在する楚墓群から出土、391件、804枚の竹簡、有字簡は730枚、長さは三類で32.5cm前後、26.5—30.5cm・15—17.5cmです。形状は上下、左右を水平に切ったものと上下左右両端を台形にしたものがある。文字の総数は一三、〇〇〇字で内容は「老子」(甲乙丙の三種)や道経のテキスト、その他は儒教関係書であり大半は佚書(書名だけが文献に残り実物はその所在を失って伝わらない書物)が占めている。⑤張家山竹簡・前漢・呂后二年(前一八六)一、二二六枚出土、六種の書籍があり律令、秦讞書(墓のリスト)、脈書(医学)、算数書(数学の解答など)、蓋廬、引書、などある。算数書八文字から萬の字三字を用いて表現の違い人間の美学が生まれていること

を話された。字形は方折体である。⑥沅陵虎溪山漢簡・前漢(前一六二)一三三六枚出土、実用公用体で草隸が見られる。玉印(呉陽)も発見された。⑦走馬楼呉簡・後漢末—三国・呉(二二〇—二三七)湖南省長沙市街の走馬楼でビル建設工事中に五六もの古井戸を発見した。井口が三五〇×三一〇、深さ五六〇cmは四層の土で固めその第二層から十萬枚以上の簡牘が出土した。第三層から生活用具、第四層には井桁に組んだ一三〇cm×一〇〇cm×一〇〇深さ五八cmの小井戸がある。これは倉井の乾燥を保持する作りと見られる。十數万枚餘のほとんどは檔案(役所の記録)である。その内容は、田地賦税券四九・八—五四・三×二・六—四・三cm。類別中もともと長くすべて竹簡、主として土地に対する税額など記している。官府文書、木牘は二三・四—二五×六—六・九cm。材質は杉材である。役所間の往復文書、司法事件の審理、上級機関への意見具申もある。戸籍簿、木牘は二三・二—三・五×四—五cm、竹簡は二二・二×二二・五×一—二cm主として戸主らの姓名、職



業、年令、身体の特徴を記している。挙薦版、名刺として使用、すべて木牘、木簡で長短、厚薄はまちまちで一種の推薦書である。帳簿、主として金品、道具、租税ほかの出納記録で関税や官吏の俸給など記したものもある。従来呉の書は「天發神讖碑」「谷朗碑」、「范字碑」などの銘石体と通行体が知られるのみであるから大量の走馬楼簡牘出土の意義は、はかりしれない。既発表分には楷書めいた書もあるが行書がほとんどである。⑧高慈墓誌・東晋秦和元年(三六六)一九九八年江蘇省南京市仙鶴山で六基発掘された。高氏の家族墓とみられる。材質は埴質(焼レンガ)で四八・一×二四・八×五・七cm隸書体だが楷書説もありトン・スー・トンの三過折のリズムがある。王建之妻劉媚子墓誌、石製三五×四五×二・五cm全文一四八字明るさあるが点画に強弱の変化がないせいで硬い感じがする。⑨郭虚己墓誌、唐・天宝九載(七五〇)一九九七年、偃師県首陽山鎮で発見された。一〇四・八×一〇六cm厚さ一六cm誌文は細い方格内に三五行、満行三四字全文で一五〇字、郭虚己墓誌(42才、多宝塔碑(43才)、顔氏家廟碑(71才)とスライドにより違いを説明された。私にとっては郭虚己墓誌は顔法と言われているパターンもなく新鮮で驚きの楷書であった。⑩臨泉靖月儀帖、西域出土残紙、唐代晩期、一九一四—一九一五年吐魯番で発見された。王羲之(十七帖)中の積雪凝寒帖の末と服食帖の二八字の残紙で章草体で図版のみで解説されていない。以上スライドに大寫された数々の文字は講演終了後の会員に多大な影響を与えたことと思います。

識

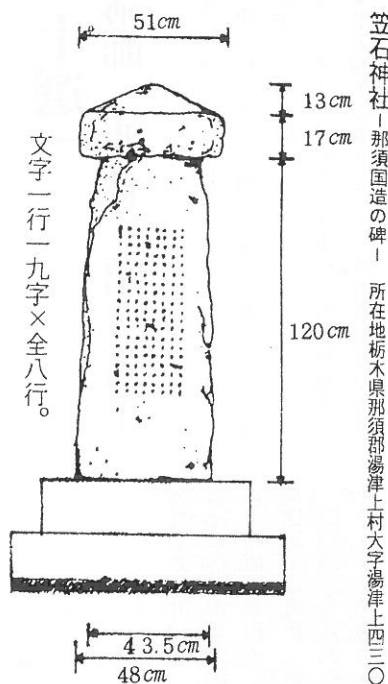
平成十七年度連盟展

書展部 室井 池水

平成十七年度 栃木県書道連盟会員展開催



県書道連盟最大の行事である平成十七年度第四四回、栃木県書道連盟会員展が四月二日(金)～二五日(月)の四日間、栃木県総合文化センター(第三、第四ギャラリー)で、栃木県書道連盟総会や講演会と同期に開催されました。例年のことではありませんが、今回も最良の展覧会を目指して、書展部長を中心に準備を重ねました。今年は特に中野会長より案内状に那須国造碑を用いたという発案があり、書展部で検討を重ね碑文の一部を案内状のバックに用いました。那須国造碑(図参照)は那須郡湯津上村に所在し、日本三古碑(本碑と上野国多古碑・陸前国多賀城碑)



笠石神社―那須国造の碑― 所在地栃木県那須郡湯津上村大字湯津上四三〇

中一番古い碑で、一九五二年(昭和二十七年)に書蹟・金石文として国宝指定を受けた、六朝書風で、氣宇の大きい隸意をおびた楷書の碑です。

本年度の展覧会状況については、先ず出品者数は、昨年を大きく上まわり、八三名増の四五二名でした。又、部門別の出品点数は、漢字部門Ⅱ二四一点、仮名部門Ⅱ五二点、調和・近代詩文部門Ⅱ四五点、篆刻部門Ⅱ二二点、五字以内大字部門Ⅱ九三点、刻字部門Ⅱ二点でした。

本年度の地区別の出品状況は別表のようになっております。

尚、四四回展の連盟賞は、総会時の講演会講師の西林昭一先生によりまして、師風の影のない独創的作品をという基本選出方針にもとづいて選出され、次の三氏が受賞されました。

加茂珠香 作品が全体に整っている

丸山曉鶴 臨書にもとづいた良い作品である

村田幽香 独自の作風で余白がきいてい

る
又、特別企画として、西林昭一先生所蔵の「中国新発見の書蹟」原拓展が、本展と併催され、次の

一四点が展示されました。

一、秦瓦文

二、侍延里買田約束石券

三、張禹殘碑

四、肥致碑

五、田舩画像石

六、許安国画像石

七、許阿嬰画像題記

八、西晋周都船塢

九、司馬金龍墓表・墓誌

一〇、欽文姬辰墓誌

一一、司馬悅墓誌

一二、劉岱墓誌

一三、随李静訓墓誌

一四、郭虚己墓誌

本展の展示におきましては、多くの書道連盟会員(搬入時六五名、展示時一一〇名、搬出時九六名)の方の協力により、作品数が一〇〇点近く増加したにもか、わらずスッキリとした展示が出来ました。御協力ありがとうございました。

会員展・地区別出品者数		
地区	会員数	出品者数
宇都宮市	330	146
足利市	33	25
宇都宮市	330	10
大田原市	40	11
小山市	50	23
鹿沼市	26	11
佐野市	45	19
栃木市	50	30
日光市	12	7
真岡市	24	5
矢板市	17	10
那須塩原市	35	23
さくら市	24	11
上野原市	3	2
河内郡	50	27
塩谷郡	49	22
下都賀郡	64	36
那須郡	26	6
芳賀郡	27	9
県外	15	7
合 計	950	451

平成十七年度連盟賞 受賞のことば

加茂 珠香

この度は、連盟賞受賞という、身に余る光栄を頂戴し、有難うございました。役員の先生方、師の赤平泰処先生、そして、いつもお力添え頂いている良き先輩の松本宣響先生のお陰と、心より御礼申し上げます。

今年は、酉年。カモも鳥。取り年になるよう頑張ろうと、取り留めもない決意を年頭に持ってみました。そうしたら、お正月も松の内に、カモなのに「つるさんは？」といわれ、同じ日に全く違う所で「かめさんですか？」と聞かれ：今年は何なのだろう？と思っておりました。

このようなことがあつての、今回の受賞です。私は、とにかく運が良かったのかもしれない。私から、この受賞を機に、拙い作品は書いていられないぞと、身が引き締まる思いです。お尻に火が付いたようで、カモが



連盟賞
「五言二句」
加茂 珠香

火の車ならぬ火の鳥状態です。今後は、焼き鳥になつて終わつたといわれないよう、いくらかでも、人の目と足を止められるような作品を書いていけるよう、力のない者なりに努力していこうと思います。一人でも多くの会員の皆様との出会いを楽しみに。

丸山 暁鶴

この度は、連盟賞をいただき、関係役員の方々及び、審査にあたりました西林昭一先生に、厚く御礼申し上げます。

今回の作品が、章草と云う、木簡等に良く出て来る一連の古草体で、たまたま西林先生の目に止まったと云う幸運に他なりません。

昔からこの章草には興味があり、淳化閣帖では第一に、漢章帝とあつて章草の名称の由来になつて居ります。王羲之・王獻之も章草を残して居り、何時の日か章草の作品を書いてみたいと、臨書を続けてまいりました。



連盟賞
「蘇軾詩」
丸山 暁鶴

た。

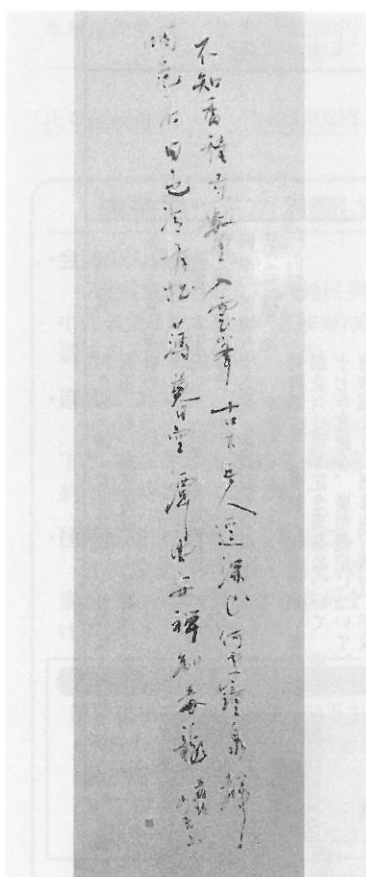
本年はじめて、五言絶句を東京に、七言一句を今回展にと、章草作品を出品しました。

「書の道とは、師風を真似する事ではなく、古典を自分の力で咀嚼して、自己の書を確立して行く事なのだ」と、教えられ、何時の間にか忠実な臨書をしながら、五十余年が過ぎ去つてしまつたのです。

今回の受賞は、「お前はまだまだ目標に向え」と云う叱咤の聲と受け止め、精進を続けて参りたいと思います。

今後共よろしく御指導賜りますよう。

村田 幽香



連盟賞
「香積寺に過ぎる」村田 幽香

このたびは連盟賞・川俣古舟賞を頂き有難う御座います。

師風の影のない・師匠の姿の見えない・独自・な作品を基本的に選出された旨の言葉を、審査に当たられた西林昭一先生よりお聞きし、私の未熟な作品が評価された事、大変な驚きと共に一枚でも多く書く努力、労力を繰り返すうち独自の作品が生まれるのではないかと信じて、時に崩れそうになりながら続けて参りましたので、身に余る慶びと感激致しました。西林昭一先生に心よりお礼申し上げます。川俣古舟賞は墨池会に所属し、故川俣古舟先生に縁のある者として、嬉しく晴れがましい思いです。又多くの皆様のご支援のお陰で受賞することが出来、心より深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

これからも新たな気持ちで精進し、多くの皆様のご指導を戴きながら、好きな道を歩みたいと思っております。どうぞお見守り下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

平成十六年度会報報告

[illegible]

平成16年度 収支決算書

「収入の部」

(単位:円)

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
1 前年度繰越金	686,445	686,445	0	
2 会 費	4,050,000	4,405,000	355,000	5000円×881口
3 基 金 より	0	0	0	
4 雑 収 入	63,555	147,712	84,157	タックシール・懇親会残
合 計	4,800,000	5,239,157	439,157	

収入済額 5,239,157

支出済額 4,532,204

差 引 額 706,953

「支出の部」

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
1 総会	100,000	98,229	▲ 1,771	会 場 費 等
2 展覧会費	1,050,000	1,098,909	48,909	
会 員 展	650,000	688,599	38,599	講 師 謝 金 ・ 会 場 費
女 流 展	250,000	266,137	16,137	会 場 費 ・ 案 内 状 他
関 連 書 展	150,000	144,173	▲ 5,827	県 展 ・ 下 野 書 展 他
3 会議費	1,100,000	820,927	▲ 279,073	
顧問・参与会	70,000	28,505	▲ 41,495	
正副会長会	100,000	63,700	▲ 36,300	
常任理事会	300,000	234,861	▲ 65,139	
理 事 会	380,000	371,099	▲ 8,901	
専 門 部 会	250,000	242,762	▲ 7,238	総 務 ・ 書 展 ・ 研 修
4 研修費	650,000	598,627	▲ 51,373	
実技講習会	570,000	542,853	▲ 27,147	講師謝金・会場・昼食補助
研修旅行	80,000	55,774	▲ 24,226	サントリー美術館他
5 地区活動費	100,000	27,130	▲ 72,870	
6 通信・印刷費	950,000	1,052,272	102,272	
通 信 費	400,000	583,540	183,540	各種行事案内送付
印 刷 費	550,000	468,732	▲ 81,268	各種行事印刷
7 渉外費	350,000	353,590	3,590	外部団体負担・手当等
8 事務局費	350,000	362,520	12,520	事 務 関 係 諸 費
9 予備費	150,000	0	▲ 150,000	
合 計	4,800,000	4,532,204	▲ 267,796	

次年度繰越金 706,953

上記の通り決算報告いたします。

 栃木県書道連盟会長 中野 永峰
 同 会 計 山田 雅子

【特別会計】

会計監査報告

1. 50周年記念行事会計

収入

 前年度繰越金 1,459,599円
 利子 53円
 計 1,459,652円

支出

 本年度決算額 36,250円
 (高校生顕彰)

次年度繰越金 1,423,402円

2. 古舟賞会計

収入

 前年度繰越金 123,350円
 利子 6円
 計 123,356円

支出

 本年度決算額 27,720円
 (古舟賞)

次年度繰越金 95,636円

3. 松島堂寄付金

収入

 前年度繰越金 501,406円
 利子 21円
 計 501,427円

支出

本年度決算額 0円

次年度繰越金 501,427円

 平成16年度
 栃木県書道連盟
 収入支出の決算につ
 いて、3月25日に検
 査した結果、使途・
 決算書・証憑等適正
 であることを認めま
 す。

 平成17年4月24日
 監事 大谷津昭男
 小森 梅壽

事務局からのお願い

・会員の入退会について

入会を希望される方は、地区理事、社
 中代表者または本人が事務局に書類を
 請求の上手続きをとって下さい。

・退会について

退会についても、同じ手続きをとって
 下さい。二年以上維持費未納者は、規
 約に基づき除籍になります。

・住所変更、住居表示変更について

住所変更、住居表示変更、姓、号の
 変更があった時は必ず事務局まで届
 け下さい。

会計について

重要事項につき必ず読んで下さい。

・平成16年度分までの未納者は至
 急ご送金下さい。

・平成17年度会費未納の方は平成
 17年9月30日までに送金下さい。

・慶(社中展、個展、叙勲、研究成果等)

・用(計報)等は事務局までご一報下さい。

平成17年度収支予算

(単位:円)

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
1 前年度繰越金	706,953	686,445	20,508	
2 会 費	4,250,000	4,050,000	200,000	5000円×850口
3 基 金 より	50,000	0	50,000	
4 雑 収 入	43,047	63,555	▲ 20,508	タックシール等
合 計	5,050,000	4,800,000	250,000	

「支出の部」

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
1 総会	100,000	100,000	0	会 場 費 等
2 展覧会費	1,100,000	1,050,000	50,000	
会 員 展	700,000	650,000	50,000	講 師 謝 金 ・ 会 場 費
女 流 展	250,000	250,000	0	
関 連 書 展	150,000	150,000	0	県 展 ・ 下 野 書 展 他
3 会議費	1,130,000	1,100,000	30,000	
顧問・参与会	50,000	70,000	▲ 20,000	
正副会長会	80,000	100,000	▲ 20,000	
常任理事会	300,000	300,000	0	
理 事 会	350,000	380,000	▲ 30,000	
専門部会など	350,000	250,000	100,000	総務部・研修部・書展部・60周年
4 研修費	630,000	650,000	▲ 20,000	
実技講習会	550,000	570,000	▲ 20,000	講 師 謝 金 ・ 会 場
研修旅行	80,000	80,000	0	案 内 印 刷 ・ 写 真 等
5 地区活動費	70,000	100,000	▲ 30,000	
6 通信・印刷費	1,170,000	950,000	220,000	
通 信 費	670,000	400,000	270,000	各種行事案内送付等
印 刷 費	500,000	550,000	▲ 50,000	会報・各種行事案内印刷等
7 渉外費	400,000	350,000	50,000	高校生顕彰・各部団体負担・交際費
8 事務局費	400,000	350,000	50,000	事 務 関 係 諸 費
9 予備費	50,000	150,000	▲ 100,000	
合 計	5,050,000	4,800,000	250,000	

収入予算額 5,050,000

支出予算額 5,050,000

差 引 額 0

寄稿

関戸本古今集における行頭の「か」とそれに関わる筆者の美意識

はじめに

金槐和歌集の「から衣……」の歌を題材にした作品を書こうと関戸本古今集（以下、関戸本）からの集字を試みた時のこと、行頭の「か」を見出そうと「平安関戸本古今集日本名跡叢刊二玄社」にあたってみたが、皆無であった。「日本名筆選19関戸本古今集二玄社（以下、日本名筆選版）」に幾度か目を通したが、行頭の「か」はかろうじて一箇所のみに見られた。意外なことであった。

これは勿論、乏しい資料の中の小さな気付きであり、論考に値するほどのことではないかとも思われた。また、たとえ僅かながらに価値あるものであるにせよ、先達諸氏の既成研究の中で触れられていることでもあらうとも考えた。しかし、普段弛みきった私の脳の皺を少しでも引き締める契機にもなるうかと思ひ、拙い論考をあえて進めることにした。ご笑覧のうえ、大方のご指導を仰ぐことができた幸いである。

本論

関戸本には行頭に用いられる「か」が皆無に近い。そこには、筆者のある意図や美意識が関わっていることが考えられる。

このような仮説に基づき、いくつかの視点

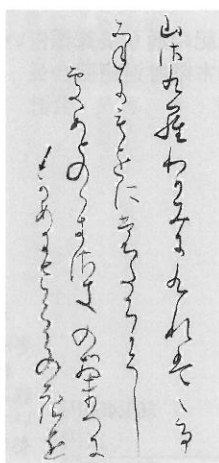
理事 腰塚 藤翠

に立つて考察を進めていきたい。

一、行頭の「か」についての他の古筆との比較
笹波会副理事長田頭一舟氏がまとめられた『関戸本古今集に用いられた「かな」の種類』を参考にさせていただくと、関戸本には、ひらがな、変体かなを合わせ、「か」の使用数は414、そのうち「か」は296となっている。これは用いられている「か」の約71%にあたる。

この「か」が日本名筆選版では、行頭にわずかに1箇所、P62の葉の最後尾に書かれた詞書の、しかも最終行の行頭に、小さく、ひそやかに見られるのみなのである。〈図①〉（以下、この論文中に示す関戸本についての頁数は、すべて、「日本名筆選版」のものである。）

〈図①〉



日本名筆選版には、詞書、よみ人の行、および1字1行の行などを含め、全体で696行あり、そのうち行頭が「か」で始まる行数は29行である。そして、その中で、行頭が「か」

で始まる行はわずかに1行だけなのである。

これは、田頭氏が示された296個の「か」のうちの0.3%の個数率であり、行数率においては、わずかに0.14%ということになる。ちなみに、日本名筆選版では、「か」に始まる歌は7首記載されているのである。

一条攝政集では、行頭が「か」の行数は64であり、これは全体の101行をもとにすると約6.3%である。これは関戸本の場合の約45倍の率にあたる。

一条攝政集も含め任意のいくつかの古筆とも比較してみたのが次表である。

関戸本における行頭の「か」が皆無に等しいということ、そして、それが他の古筆との比較において、関戸本の特殊性の一つであるということが言えるのではないだろうか。

古筆名	全行数(A)	行頭が「か」の筆数(B)	(B/A)に 対する比率(%)
関戸本古今集	六九六	一	〇・一
一条攝政集	一〇一一	六四	六・三
高野切第三種	一三八	四	二・九
針切	一五五	七	四・五
西本願寺三十六人集	二二八	九	四・一

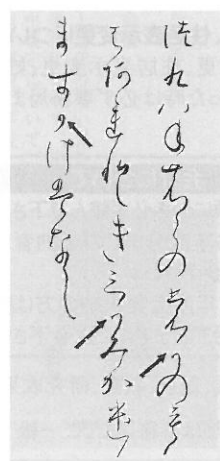
二、「か」の字形と、そこに見られる筆者の美意識

行頭に「か」を用いなかった理由を、筆者がその文字を書く時の字形との関連から考察してみた。

関戸本には行頭以外には多くの「か」が用いられ、その字形の典型は〈図②〉に例示するとおりである。また、行頭に用いられたものは、前述のとおりただ一例（日本名筆選版）

のみであるが、その字形は〈図①〉で先に示したとおりである。

〈図②〉

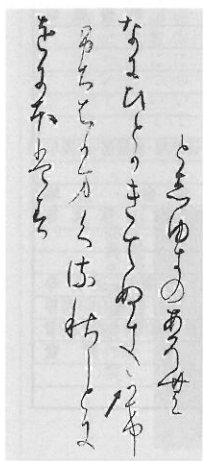


これらをよく見ると、いずれも字母の第1画にあたるものは明確な横画として、あるいは斜画として強調されてはいない。行中の2例（〈図③・④〉）と行頭の1例（〈図①〉）のみが、この画が前の文字との連綿を断つ形で書かれているが、きわめて目立たぬものになっている。行中の場合、ほとんどのものがこの画にあたる部分が前の文字の終画、あるいはそこから来る連綿線の中に位置付けられているがその存在の印象すら稀薄なものに見える。（位置付けの意識は感じられるが。）

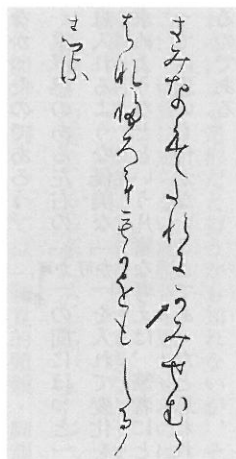
このことについて、他の古筆ではどうだろうか。

たとえば、香紙切では、行頭・行中ともにこの画が関戸本と比較して明らかに強く表現されている例を散見できる。〈図⑤・⑥・⑦〉

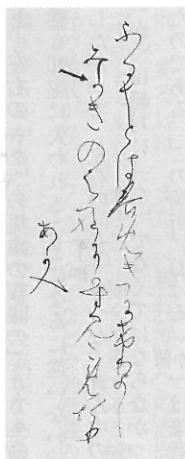
〈図③〉



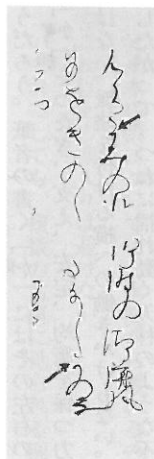
〈図4〉



〈図5〉

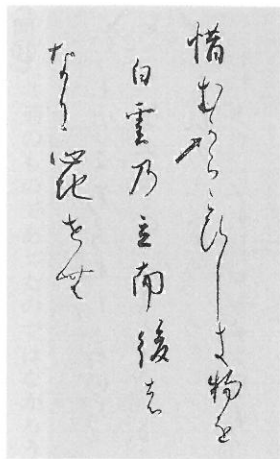


〈図6〉

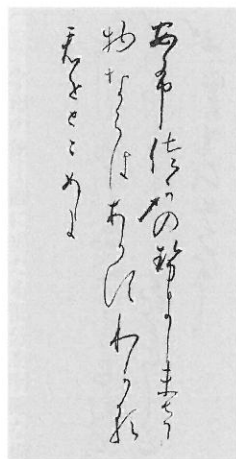


〈図7〉

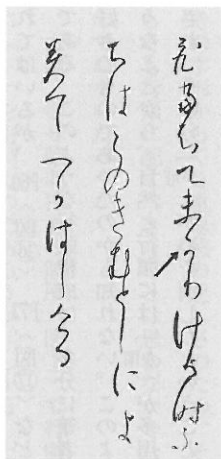
〈図8〉



〈図9〉



〈図10〉



恣意的な推理ではあるが、関戸本の筆者は「か」の最初の画を強く表現することへの意識もしくは趣向を持たなかったのではないかと、そして、そのことにより、「か」をおもに前後の文字を断絶のない線条でつなぐような形において使い慣れるようになったのではないかと思われる。

したがって、重厚感に欠ける自身のこの字形は、行頭に配すべきものではないという筆者の意識がつねに働いていたのではないかと思われるのである。

三、行頭間の美意識・対称美志向の美意識について

「か」の字形に関わる筆者の美意識により、行頭の「か」の使用を忌避したのであるとの推論から、さらに、ここには次のような行頭間における美意識も影響しているのではないかという新たな推理も思い浮かんだ。

その美意識とは関戸本の行頭の各所にうかがわれる対称美志向の美意識である。「対称」には「点対称」、「線対称」などのとらえ方があるが、対称の位置にある行がどちらも天より地に流れ、相反する流れにはならない書の世界なので、当然「線対称」という概念に立つて述べていきたい。ただし、対称の位置にある文字は鏡文字の関係にはないので、美学的あるいは科学的な厳密な意味での対称ということではなく、あくまでも観念的なものであると理解していただきたい。

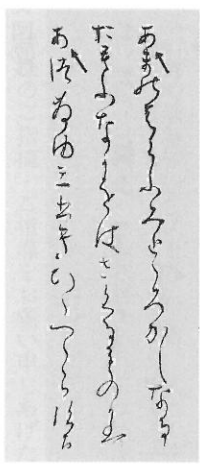
筆者は、近隣の行頭に同音文字が並ぶ場合、あえて、対称関係に同形の文字を配したいという意識を持っていたのではないかと思われる。

P14の「このまより……」の「こ」、すぐ次の行の「こころづくしの……」の「こ」の並列へ図11、また、行を中間にはさんで左右に「あ」を配したP42の例へ図12、さらに、中間に「た」で始まる行をはさんだ「う」の左右並列へ図13などの箇所はこのような筆者の意図を強く感じさせる。(P47)

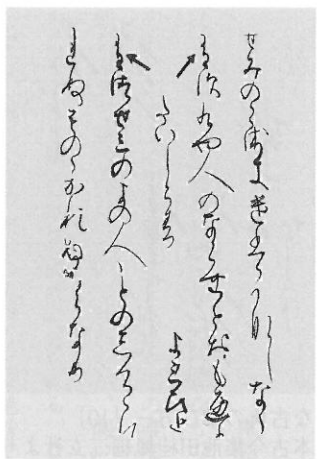
〈図11〉



〈図12〉



〈図13〉

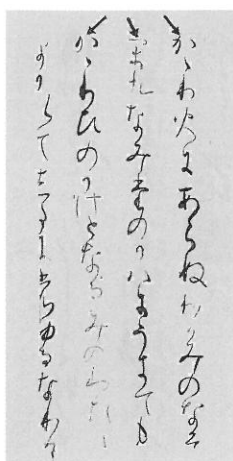


特にP47の場合は、一段下がった詞書の行頭の「た」が天秤ばかりの中央の支点となり、それが支える梃子の左右の皿にあたることに「う」が位置付けられ、あたかも、安定した均衡を保っている天秤ばかりを目の当たりにしているような感じさえする。この箇所は筆者の対称美志向と同時に均衡美・安定美志向の強い意識も感じることのできる箇所である。

さて、この論考の主題である行頭の「か」について、今述べてきた筆者の美意識を絡めながら論及していきたい。

関戸本では、近隣の行頭に「か」のある場合には、偏と旁の構成の文字を字母とする重厚感を持った「か」を並列させ、どちらも他の異形文字に置き換えなかった箇所がP36に見られるへ図14。同形の「か」を左右に配し、中間の「か」がそれをつなぐような働きを見せている箇所である。

〈図14〉

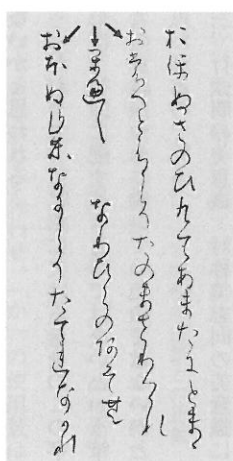


もし、この箇所を幼児に見せたら、大きな複眼を左右に持ち、真ん中に額に横皺のある顔面を持った昆虫の頭部を想像するのではないだろうか。そう思つて見ると、左右の「か」が生命感を放ちきらめき出すような気さえる。もし、この中央の「か」を関戸本の筆者が書くような「か」に変換したとしたらどうだろう。筆者の書く「か」にはその左右の「か」をつなぎ、支え、安定、均衡を保つ力はない。脈絡を付ける横への働きかけもない。したがって、つねに揺れ動く天秤のような不安定さを感じさせることになるのであろうし、左右の「か」の昆虫の複眼のごとき生命感も即座に失われることになるに違いない。したがって、左右の「か」をつなぎ真ん中の「か」は絶対に「か」でなくてはならなかったのである。この箇所における「か」は筆者の審美眼から絶対に他と変換し得るものではなかったであろう。

重厚感のある左右の「か」の間にほっと一息入れるような優美な「か」を入れて変化を求めようなどという凡庸な考えは、筆者にとつては思いも付かないことであつたと思われるのである。

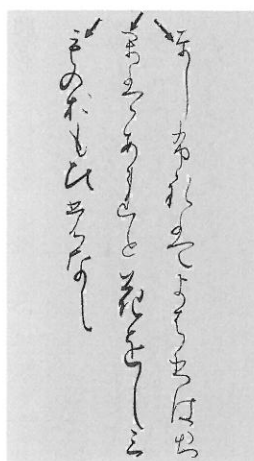
これに類似した箇所はP45〈図15〉にも見られる。同形の文字「お」を、中間の詞書の「か」でつなぎとめているが、これも筆者の美意識では「か」をはじめとする他の文字に変換することはできなかったであろう。

〈図15〉

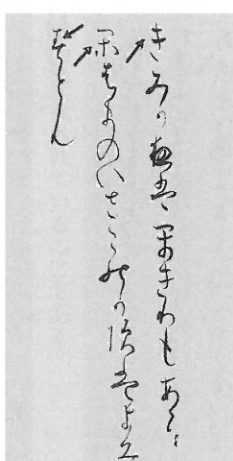


詳細に見ると、この箇所は「か」の位置が一字分低いこと、その左右の「お」に濃淡の差が大きいことなど、P36の例と異なるところもあるが、それでもなお大きな類似性を感じさせる箇所である。他にも、このような箇所は見受けられる。左右に異形の文字が使われているが、P60〈図16〉、P73〈図17〉などである。このような行頭構成は、多分に筆者好みのものであつたのかも知れない。このようなことから、自然と行頭には「か」が多用され、その分「か」が姿を消したということも考えられる。

〈図16〉



〈図17〉

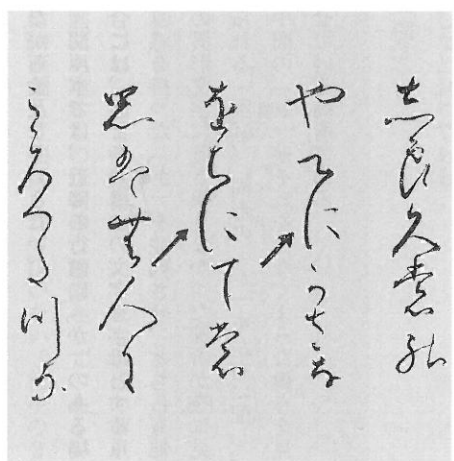


この筆者好みの行頭構成の中で、もつとも鮮烈な印象を与えるのは、やはり、先に詳述したP36の箇所ではないだろうか。この箇所は、書き終えた筆者が思わず心中で快哉を叫んだであろう出色の箇所ではなかったかと思うのである。

今まで述べてきた、関戸本における、行頭の対称美志向の美意識と共通するものを感じさせる例は、他の古典「元永本古今集」にも見受けられる。

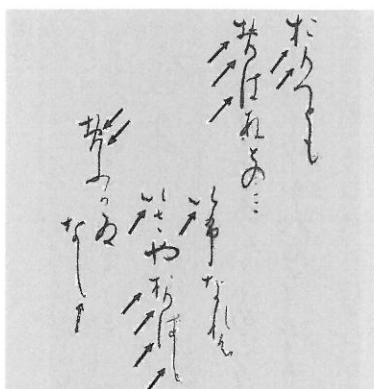
その一つは、貫之歌の「しらくものやへにかさなるをちにても思はむ人にこころへだつな」〈図18〉で、隣同士の短い行の全く同じ高さに、全く同じ墨の濃さで、全く同じ大きさ、全く同じ字形の「に」を並べた箇所がある。これは、行頭における例ではないが、筆者の意識にあるものは関戸本の行頭における対称の美意識と共通するものではないだろうか。

〈図18〉



元永本古今集にはもう1例「おんへともおもはすとのみいふなればいさやおもはしおんふかぬなし」がある〈図19〉。ここでは1首の中に「於ん」を2回、「おん」を2回、「い」を2回と隣同士の行の同じ高さに、あるいは対称的位置に、そして、崩れ対称（後に述べる）の位置に同種の字形で位置付けている。しかも、行脚・行尾には同形の「し」が一行おいて配されている。

〈図19〉



図⑮・⑯の場合、筆者は、これは単なる戯れ心による造形だと言うかも知れないが、そこに、俗気にならない洒脱さを思わせるのは見事である。根底に今まで述べてきたような対称美・均衡美・安定美への志向、そして、特に図⑯の例については「聴覚的頭韻・脚韻の一致」、「視覚的頭韻・脚韻の一致」への志向、あるいは、また、「雁行美」への志向（注目すべき文字を残し、他を捨象すると雁行の情景が浮んでくる）などなどの美意識の働きがあるからこそ具現でき得た表現であると思うのである。

元永本の例については、本筋から離れるのでこれ以上の深入りは避けた。

いずれにしても、複数の古典に見られる関戸本に共通する美意識はこの時代に流れる美意識の一つであったとは言えまいか。さらに多くの古筆にもつぶさに当たってみたかったが、そのいとまがなかった。いずれ試みたいと思う。

余談ではあるが、このような、対称・安定・均衡を志向する美意識は、当時の2塔1金堂の寺院建築の様式にも相通じるようなものと思わせる。

これは、書の世界だけでなく、当時（上古・中古）の日本民族一般の美意識の深層にあった共通のものであったのではなからうか。

か。

四、まとめ

関戸本の筆者の行頭の「か」への思いと、それに関わる意図・美意識を2つの側面からまとめてみた。

(一) 字母の第1画に当たる部分を明確な横画・斜画で表わさない筆者好みの「か」は、その字形からくる重厚感の乏しさのため、そもそも行頭に配すべきものとは思わなかったのではないだろうか。

では、なぜ筆者はあの箇所へ図①で行頭に「か」を用いたのであろうか。しかも、ただ1箇所この行頭のみに。考えられることは、そこは行頭ではあるが、語頭ではなく、筆者としては、前行の文字につなげて、よどみなく読み続けてほしい1語があったからではないか。それで、比較的小さく、さりげなく、目立たずに表わせる「か」を選んだのではないだろうか。

では、その1語とはなにか。それは、「花がめ」である。当時も恐らくここでの「花がめ」は、和な鼻濁音で発音されていたであろう。それに加えて、「そめどのきさきのおまへに……」さくらの花を上げようという、いかにも春らしい、うららかな幻想を誘う場面での「花がめ」という語中の文字である。この艶やかな語中にあるからこそ、筆者は、筆者な

らではの優しい姿勢を持つ「か」を置きたかったのであろう。

関戸本の中でのこのかけがえのない唯一の行頭の「か」は、実にたおやかな光彩を、静かに、ひそやかに放っているのである。

(二) 近接する複数の行頭に「か」が並列する場合にも、筆者は自身の字形へのこだわりからか、「か」を忌避し、趣向による理由からか「か」を多様化した。

「か」が3つ行頭に並列する場合などでも、両端にはあえて「か」を用い、中央には、その両者を脈絡付けるのに適した字形の「か」を配した。

この意図的な脈絡付けが対象美をいつそう際立たせたのではないかと思わせる。

この行頭構成における対称美志向の美意識は関戸本を特徴付ける最たるものの一つとは思いますが、現代の書の美意識にそのままつながるものであるかどうかは疑問である。両者の間にいささかの乖離のあることを覚えるのである。

おわりに

分割・散逸している資料や諸家に所有され未公開の資料等の存在を考える時、極めて管見にして、独善的、かつ狭隘な識見による論考であったことと恥じ入るばかりである。

皆様のご指摘・ご指導をお願い申しあげた

い。

―付記―

先に、元永本についての例示の中で、卓見による仮称「崩れ対称」（多くの行頭などの同形同字または類似形異字を高さや墨の濃度等を違えて並べる）について触れたが、関戸本にも7、8箇所この構成が見られる。なかでも、P44の「を」同士の場合などは絶妙である。しかし、「か」に関わる例が無いので詳述は避けた。

○主な参考古筆・文献

- ・関戸本古今集（日本名筆選二玄社）
- ・元永本古今集（書芸文化新社）
- ・針切（平安朝かな名跡選集 書芸文化新社）
- ・関戸本古今集（日本の名跡叢刊二玄社）
- ・一条攝政集（一楽古筆叢書 内山松魁堂）
- ・西本願寺三十六人集伊勢集（書芸文化新社）
- ・香紙切（原色かな手本二玄社）
- ・高野切第三種（書芸文化新社）
- ・かな古典の学び方8関戸本古今集（桑田三舟編二玄社）

この論文は月刊書道世波において会長賞を受賞されました。

世波誌三月号（第三三六号）に掲載された論文です。

地区だより

(小山地区)

「小山市書道連盟」

理事 篠原 珠篁

小山市書道連盟の近況を述べてみたいと思います。

(組織)

顧問「初代会長」 上野鶴陽

〃 国木軒陽

〃 中島鶴州

〃 篠原珠篁

〃 倉持玄風

〃 鈴木小宛

〃 穂山玉星

〃 生沼冬情

〃 津金鶴邨

〃 山崎秋月

副会長 藤澤翠待
事務局長 塚原彩香
理事会計 松山康雲
理事 他、会員百五十

三名によって構成され、本年度、創立二十周年を迎える事となりました。これも全会員の皆様の地道な活動により、今では沢山の団体や個人が参加され創作活

動と共に高度な書道文化を求めて活発な書活動が続け、つぎの行事にその成果を発表、参観者の好評を得ております。小山市書道連盟展、小山市文化祭への参加、小山市文化協会主催チャリティ展、下都賀の書展への参加によって創作活動の成果を発表しております。

ここに平成十六年度からの活動の一端を記してみます。

一、第四回下都賀の書展、三十八名参加
一、小山市書道連盟研修旅行、福島県、諸橋美術館等見学その他 七月十日
一、小山市書道連盟理事有志によるミニ書展を小山市グランドホテルにて実施 七名出品

一、第五十一回小山市民文化祭書道部門展参加、平成十六年十一月十六日～二十一日
平成十七年度

一、小山市合同チャリティー展参加、書道部門出品者十八名 二月十七日～二十日
一、第五回下都賀の書展参加 出品者三十八名 六月九日～十二日

その他県書道連盟、下野の書展、栃木県芸術祭、読売書法展、毎日書道展、産経書道展等各展に参加、多数の入選入賞者が出るに至っております。

今後とも会員一同一丸となって会員の増員、そしてさらに充実した小山市の書道文化振興発展のために、さらなる書活動を続けて行きたいと思っております。

なにとぞ御指導、御鞭撻の程をお願い申し上げます。

(足利地区)

「これからの足利地区」

理事 関口 鶴情

昨年の四月で足利書道連盟創設三〇周年となり記念にふさわしい連盟展となりました。

現在百五十名の会員がおります。この写真には四館の展示室の一つで、この時の出品は二百五十点程でした。足利書道連盟の構成内容は、十一社と無所属の十二所属で運営されております。主に読売展や毎日展、刻字と篆刻は日本刻字展と日本篆刻展など、中央での書展に参加する方が多いと思います。年一回の社中展を開催している社中も多く、墨心書展や白玄書展、杏壇篆会展、足利刻字展などは二百点以上の出品があり、足利では有名です。

又、秋に行われている市民文化祭は一般の自由参加もあり足利書道連盟の主管で活動しており、漢字、かな、篆刻、刻字など多彩な作品が二百点以上出品されております。この文化祭での優秀作品は別途、足利市立美術館に特別展示もされております。しかし足利市には未だに文化会館等の展示場所が無く、市民会館での小品展示に限られております。

さて足利地区から県連盟に加入している会員が十名に満たないという長い歴史がありました。交通の便の悪さと、足利独自の活動と言ってしまうと、それまでの話ですが、あまりにも県連盟の行事に参加出来なかった事が

残念でなりません。一昨年から初めて理事が足利地区に誕生ということで、県連盟への加入が増加して、現在三十五名となりました。四月の県連盟会員展には三十名程が出品しましたが、その内容の素晴らしさを出品者は感じました。加えて連盟役員を始め、スタッフの充実した熱意あふれる仕事ぶりに接し、これからの連盟活動に参加出来る嬉しさもあり、精一杯共に歩ませて頂きたいと肝に命じた次第です。先輩諸先生から、ご指導を頂きながら、足利地区として、これから出来る限り努力させて頂き、連盟発展の微力となるよう頑張りたいと思います。



津久井汀舟先生の御霊安らかに

弔辞

会長 中野 永峰

謹んで、津久井汀舟先生の御霊前に捧げます。平成十七年三月二十七日、突然の訃報に接し、私達は、人生の無常と儚さに、ただ声を呑み、哀悼の情極まりない次第でございます。

栃木県書写書道教育研究会副会長をなされ、書道教育者としての功績は誠に多大なるものでありました。

回顧いたしました、先生には、昭和十七年栃木師範学校を卒業され、間もなく、兵役に二年餘を従事し、昭和二十年戦後教職に復帰され、昭和五十八年迄、長く高等学校の書道教育に当られました。

栃木県高等学校書道部会副部長、顧問。

この間における先生の書歴につきましては、中央書壇にては、昭和三十六年に、文化勲章受章、文学博士の西川寧先生に師事され、日展に四回入選されました。そして現在迄、謙慎書道会理事、^{いん}猗園文会会員として活躍を続けてこられました。

県内におきましては、昭和四十五年に星山

社を設立し、その主宰として社中展三十五回を重ね、書道古典の見地から本格的な指導をなされ、多くの優れた門人の養成に当られました。

栃木県書道連盟の創立会員であり、書道連盟顧問として本県書壇の重鎮でありました。県芸術祭審査員、下野の書展代表作家理事、栃木の書壇五十人展理事、宇都宮市民芸術祭運営委員審査員、宇都宮書道学校副校長、臥龍会理事等の要職を歴任されました。

平成五年には、星山社の会名の山上の星の如く志気高き個展開催、平成十一年には、色紙展を開催され好評を博されました。

このように、県書壇における御功績は誠に多大なるものでございました。

先生は、穏健誠実、信念に生き、学生時代

のスポーツや、兵役で鍛えたという偉丈夫でありました。隠し芸として、手品が大変上手で宴席では常に人気がありました。

先生の書道人生は、六十余年に及び、本格の書研究に徹せられました。

長く謙慎書道会に所属され、師風に基き漢魏六朝及び清朝書風を根底として、剛放雄大な大字書や、多字数行草三行物の力強い書は、煙銀の魅力を持ち深い感銘を与えました。

先生には、享年八十三才でございました。誠にその御逝去が惜しまれてなりません。

私達は、書をもって公私共に盡力なされた先生の御足跡を学び、栃木県書道連盟の発展に努めたいと存じます。謹んで御冥福を御祈り申し上げる次第でございます。 合掌

平成十七年三月三十一日

栃木県書道連盟会長 中野永峰

御寄付御披露について

平成十七年五月三日、故津久井汀舟先生の御遺族様より、県書道連盟に、御鄭重な、金額三十万円也の御寄付を戴きました。

理事会の席上におき、故人の御高志を御伝えいたし、今後本連盟運営に有難く使用させていただきますことになりました。

ここに、深甚なる謝意を表しますと共に、御報告に代えさせていただきます。

謹言



凜々しき陸軍少尉（昭和19年）



在りし日の津久井先生

書道連盟会員展の案内と

那須国造碑について

会長 中野 永峰

来、誠に有難うございました。

平成十六年度の総会において、連盟会員展の案内状を作ってもっとPRをし、書道文化活動の意識を積極的に高めていただきたいとの要望により、早速書展部が平成十七年度からの実施を図り、「第四十四回栃木県書道連盟会員展」の案内状を作成して、全会員及び県内各地の文化施設や報道機関に配布いたしました。

お陰様で、会員の意欲も高まり出品数も急増し、作品も向上し、熱心な參觀者も増えて、連盟会員展の画期的な盛会を得ることが出

会員展の案内状に用いた那須国造碑については、ご存知のことと思いますが、本県の誇りとする国宝（明治四十四年八月指定）でありますので、概説させていただきます。

那須国造碑。白鳳時代・七〇〇年。栃木県那須郡湯津上村に現存し、笠石神社のご神体として祀られている。



那須国造碑（碑面）

日本書道史上、多胡郡碑（群馬県・七一年）、多賀城碑（宮城県・七六二年）と共に日本三古碑として有名である。

碑文は、ご神体の、那須国造直韋提の善政を讃えた碑である。国造は、後の郡長の官職名である。この位は今日の正六位に当る。直は、姓で家柄の尊卑を表わすもので、国造に多く贈られていた。

大化の改新（六四五）により、那須国が郡に改められたので、永昌元年四月、持統天皇から那須郡長に任命された。そして、直韋提は文武天皇の四年（約千三百年前）正月二日に死去された。よって子息の意斯麻呂が、新羅の帰化人（此の碑文の作者）と協力して墓碑を建てた。

直韋提は、豊城入彦尊の子孫で、博愛の心が強く、新羅の帰化人をいたわり、芦野町唐木田村に土着させて、一生安楽に送らせた。

それで、直韋提の没後其の恩顧を受けた帰化人等が、この頌徳碑（徳を讃えた碑）を建立した。

碑の大きさは、冠石を含めて高さ一五〇cm、幅四八cm、一字約二cm、八行一九字詰、全一五二字。

文字は、行書体書を少し含み、やや隷書体的趣を残し、六朝時代の墓誌銘をしのばせる古雅な謹楷書体。隋以前六朝時代の雄渾な氣宇風韻を漂わせ、又、大和、奈良時代（飛

鳥、白鳳、天平）の写経等を彷彿せしめて、鋭く喰い入った筆先をとどめる文字である。

那須国造碑は、建碑以後何時の頃よりか草むらの中に埋もれて知る人もなかった。唯、里民は碑の頭上に笠石があるので、此の石を下したり乗せたりして、雨乞をしたのに効験があったという。然るに貞享四年、水戸黄門光圀が馬頭町梅が平の大金久左衛門重貞の言上により、保全の恩召を以って、元禄四年に御堂を建立し、現在の如く安置したのである。

碑は光圀の儒臣佐々氏の手に触れるまで、野火に遭ったりしていたようであるが、銘文の刻された碑面は、付近の河原などにある硬質の花崗岩黒御影石で、土中にあったために、千三百年の歳月の経過を文字の少剥落欠損のみにて、鮮明に今に伝えられている。

那須国造碑は、極めて厳正なものである。微塵も危げな筆画はなく、文字は直接碑面に書かれて、丹念に刻されたと思われる。硬い碑面に動く張りの強い鋼鉄線の筆画は、鋭利なV字状のカットに彫られ、且つ高所よりゆるぎなく大空間を統一する筆意には、權威至現と鎮魂頌徳の建碑企画の熱誠と、永劫不変の恒情をもった人間の真摯な姿が伺えるのである。又那須国造碑は、古代を直接現代に結ぶ文化遺産であり、当時の那須の風土とそこに息づいた人間や、そこに根差された歴史のドラマを、懐かしく偲ばせるのである。

地区別催し物案内

※ここに掲載されているのは平成17年7月20日までに事務局へ連絡があったものです。この他にも企画があると思われます。詳細は各地区理事または関係機関にお問い合わせ下さい。(連盟主催のものを除く)

塩谷郡	芳賀郡	小山市	佐野市	大田原市	栃木市	日光市	鹿沼市	宇都宮市	
				○第29回那北書展 (原ハルモニーホール 「印南雲流」)		○出光コレクション による小杉放庵の人物展 (9月9日)小杉放庵 記念日光美術館 「放庵忘・特別講演 会」(16日)同美術館	○第4回鹿沼市書道 連盟展(23日)鹿沼 市文化活動交流館ギ ャラリー 「鹿沼市書道連盟」	○第3回生涯学習書展 (25日)県総合文化 センター「桐葉堂」 ○県青年書作家協会総 会(22日)ホテル丸 「塚原秀蔵」 ○文化教養講座「金文 の世界」(29日)6月以 降9月まで全4回「県 総合文化センター」(県 文化協会・県青年書 作家協会・下野新聞)	4月
○第28回高根沢町書 道連盟代表・選抜書 展(6日)10 栃木県総合文化セ ンター「鈴木源泉」	○茂木町書道連盟総 会・実技研修会(22 日)茂木町民セン ター「矢野弓翠」								5月
○第5回高芸文會書 展「併催」鈴木源 泉書展 (16日)20高根沢町元 気あつぷむら 「鈴木源泉」	○市貝町書道連盟総 会・実技研修会(26 日)市貝町中央公民館 「刑部素心」	○第5回下都賀の書 展(9日)12 栃木市文化会館 「田中暁亭」	○佐野書道連盟総会 (期日未定) 「森田桂石」		○第5回下都賀の書 展(9日)12 文化会館「田中暁亭」		○鹿沼市書道連盟総 会(11日) 鹿沼市情報センタ ー		6月
		○第8回小山市書道 連盟創立20周年記念 展(28日)31 小山市 「ロブレ生涯学習セ ンター」(篠原珠篁)	○安佐書道振興会 (期日未定) 第11回総会	○第26回わかささ 書展(16日)18 野が原ハルモニーホ ール「長嶋石城」				○第40回素心社展 (16日)20 県総合文化 センター ○「中井史朗」 ○第36回星山社書展 (21日)24 県総合文化 センター ○「館沼天游」 ○第1回毎日書道展 審査員展栃木の会 (22日)26 県総合文化 センター「酒井真沙」	7月
			○佐野秀郷 子供書道展 (6日)7					○第53回清生書道 展(8日)9 県総合文化 センター「中野永峰」 ○第31回栃木県小 中学校教職員書展 (20日)22 県総合文化 センター「影山房興」 ○第2回萌黄会書 展(19日)22 県総合文化 センター「吉田景堂」	8月
								○第32回公募東日 本書展(22日)23 県総合文化センタ ー「東日本書道会」 ○第30回記念下野 の書展(1日)6 福田屋「ヨッピーン グ」 ○第28回頂門会書 展(8日)11 県総合文化セン ター「吉田竹溪」	9月
☆その他 グループ 005・wの会「書展」 壬生町 ギャラリーカフェ・啓 10/1~10 0282(82)6626 出品者 女流14名 (代表) 村田幽香			○第26回市民文化祭 (22日)23 佐野市文化会館 「佐野市文化協会」	○第34回抱原展 (22日)23 那須野が原 ハルモニーホール 「酒井真沙」			○第27回鹿沼市文化 祭書道展(7日)9 鹿沼市文化活動交 流館ギャラリー 「鹿沼市文化協会」	○県芸術祭書道部門 (29日)8 県総合文化センタ ー「県文化協会」 ○第8回県小中學生 選抜書道展 (8日)10 県総合文 化センター	10月
		○第52回小山 市文化祭(9日)13 小山市文化 センター「小山 市文化協会」							11月
									12月
							○第33回鹿沼市民書 初展(下旬) 鹿沼市文化活動交 流館ギャラリー 「鹿沼市ほか」	○第33回清明書展 (20日)22 県総合文 化センター ○「中野永峰」 ○第33回栃木県高 等学校書道教員展 (12日)15 県総合文 化センター	1月
								○第11回栃木の書壇五 人展(15日)21 県総合文化セ ンター	2月
	○第3回茂木町書道連 盟展(15日)28 茂木町道 の駅「おもてなし館」 ○「矢野弓翠」 ○第10回市貝町書道連 盟展(未定)市貝町庁舎	○小山市チャリティ 展(期日未定)小山市 「ロブレ生涯学習セン ター」(小山市文化 協会)		○第3回大田原市書道 連盟展(24日)26 那須野 が原ハルモニーホ ール「酒井真沙」				○第8回県 青年書作家 協会書展 (10日)12 県総合文化 センター ○「塚原秀蔵」 ○「朴豊会書 展」(17日)21 県総合文化 センター「赤澤豊」	3月

第一回栃木かな書展

理事 腰塚 藤翠

ほぼ全員が県書道連盟会員である栃木市の
仮名書家が第一回栃木かな書展を開催した。

主催は近年結成された「栃木かな書道会
(代表腰塚藤翠)」。後援は栃木県書道連盟・
栃木市教育委員会。会期、三月十五日より二
十日まで。場所、栃木市昭和町「三越栃木店」
催事場。

今回の出品者は、植竹香芳・腰塚藤翠・松
涛隆子・松本畔雪・丸山満恵・村井久子(五
十音順)の六名。皆、栃木かな書道会理事で
あり、それぞれが中央では異なる会派に所属
するメンバー。それだけに二十五点の出品作
は多彩な個性を持ち、参観者からも興味ある
展覧会との評
をいただいた。



会長中野永
峰氏はじめ三
百余名の来観
者からあたた
かい助言をい
ただけたこと
に感謝申し上
げたい。
今後とも回を
重ね、斯道文
化発展に尽し
たい。

事務局より 事務局長 大浦 舟人

平成十七年度通常総会

平成十七年度の総会は、四月二十四日(日)
午後一時より二時半まで、栃木県総合文化セ
ンターサブホールにて開催されました。

開会に先立ち、進行を担当する総務副部長
の村松太子氏より当日の出席者が一九六名
(昨年は一三二名)、委任状提出者五二二(同
四三三名)と合わせて七一七名(議決権行使
率75%、同五六五名)となり規約第二三条に
より総会が成立することが報告されました。
この日の時点で会員数は九四八名。この一年
間で八五名の増加です。総会出席者等も増え、
県書連がますます活発になっているのを感じ
ます。中野永峰会長の挨拶の後、議長として
清水魚心氏(栃木市)が選出され議事に入り
ました。また、書記には森田桂石氏(佐野
市)・兼目悠久氏(鹿沼市)、議事録署名人
には木曾梅邦氏(宇都宮市)・石川善克氏
(藤岡町)が選出されました。

【議事】

第一号議案

平成十六年度事業報告及び収支決算
報告について・監査報告

第二号議案

平成十七年度事業計画(案)及び収
支予算(案)について

第一号議案については、事務局長からの事
業報告と会計の山田雅子氏(宇都宮市)によ
る収支決算報告の後、監査の大谷津紫水氏
(宇都宮市)と小森梅寿氏(宇都宮市)から
監査報告があり、原案通り承認されました。
第二号議案の各事業計画については、担当
の専門部長(総務・研修・書展)から、予算
については会計より詳細な説明がありまし
た。質疑応答では、女流展の意義と予算に関
する質問があり、出品料などを会計上明確に

報告すること、今後の開催についても常任理
事会・理事会等で協議をすることを確認しま
した。

創立六十周年記念事業

栃木県書道連盟が設立したのは、昭和二十
二年十一月二十三日。その日、宇都宮第一高
等女学校(現宇都宮女子高等学校)に齊藤松
雲、霞田真斎、日賀野東華、宮下竹洞、川俣
古舟、中井史朗、白石宙和、津久井汀舟、橋
本素碩ら二十余名が集い結成式をあげたので
す。実は今年には五十八年目にあたり、満六十
年を迎える平成十九年十一月二十三日が創立
六十周年の記念日となります。

現在、記念事業実行委員会が記念事業の内
容について検討を進めています。会員の皆様
のご協力をお願いいたします。

来年は役員改選の年

本連盟の役
員は、規約に
よって任期が
二年となつて
いるため、来
年度の総会に
て新役員の選
出(承認)を
することにな
ります。

女流展の飾り付け終了後の全体会



市町村合併
により選出の
地区割りも変
更になります。
詳しくは、
第二回理事会
(11/6)に
て協議しま
す。

平成十七年度事業計画(主なもの)

顧問参事会

平成十六年四月十九日(火) ホテル丸治

第四十四回会員展

平成十七年四月二十二日(金) 二十五日(月)

県総合文化センター第三・四ギャラリー

『栃木県書道連盟賞』入賞者

村田幽香・丸山曉鶴・加茂珠香

通常総会

平成十七年四月二十四日(日)

県総合文化センター サブホール

講演会 講師 西林昭一 先生

(跡見学園女子大学名誉教授 前書道連盟会長理事)

第一回正副会長会・第一回常任理事会

平成十七年五月八日(日) ホテル丸治

第一回理事会

平成十七年五月十五日(日) ホテル丸治

各専門部会 十・十五回程度実施予定

会報発行 平成十七年九月一日(木)

第二回創立六十周年記念事業実行委員会

平成十七年九月十一日(日) 十六時 丸治

第二回常任理事会

平成十七年十月二十五日(火) ホテル丸治

第二回理事会

平成十七年十一月六日(日) アピア

県展入賞入選者のつどい

平成十七年十一月六日(日) 会場 アピア

『県芸術祭会期十月十九日(土)十一月八日(火)』

第三回理事会 十二月十八日(日)

研修旅行

期日 平成十七年十一月二十七日・二十八日

内容 MOA美術館(熱海) 見学ほか

高校生顕彰『栃木県書道連盟表彰』 十二月上旬・二月

第二十二回女流展

平成十八年一月七日(土)・十日(火)

県総合文化センター第四ギャラリー

搬入・飾り付け 六日(金) 出品料 千五百円

講評会 八日(日) 講師 未定

実技講習会

期日 平成十八年三月十二日(日) アピア

講師 有岡麗佳先生(日展会員、読売書法会

常任理事、謹慎書道会常任理事)

編集後記

玉稿が寄せられ、会報24号が誕生しました。
ご高覧ください。この連盟が書の大好きな人
の和で育っていることに感謝します。

(総務部)